

黒川温泉の観光地形成における協働プロセスに関する研究

熊本大学 学生会員 光永和可 熊本大学 正会員 田中尚人

1. 背景・目的

日本の温泉場は、かつては地元住民の湯治場として利用されてきたが、近年では交通網の発達などリゾート化し、観光地へと変化してきた。多くの温泉地は、もともと観光目的で作られた場所でないことから、観光地として成立するまでに、様々な課題が生じる。温泉場が、多くの観光客から支持を得る観光地になるためには、様々な組織が、目標を共有し、協力して課題解決を行うことが必要であり、本研究では、これら一連の協力活動を「協働」と定義した。

本研究では、近年観光地としても有名になった熊本県阿蘇郡南小国町の黒川温泉を対象として、諸課題をどのように解決してきたのか、種々のステークホルダーにインタビュー調査を行い、観光地形成における協働プロセスを解明することを目的とした。

2. 研究対象地の概要

各種文献資料、既往研究の整理、現地踏査により、研究対象地である黒川温泉の地勢と歴史を整理した。

(1) 黒川温泉の地勢

黒川温泉は、阿蘇くじゅう連山の一溪谷に位置し、遠い、狭い、急である等の、立地的課題を抱えている。

図-1 に黒川温泉の案内図を示した。30 軒の温泉がひしめき合うように立地していることが分かる。



図-1 黒川温泉街の観光案内図（組合作成）

(2) 黒川温泉の歴史

表-1 に黒川温泉の歴史を整理した。

地元の温泉場として成立した黒川温泉では、観光で訪れる宿泊客は少なかった。1961（昭和 36）年に 6 軒

の旅館が黒川温泉観光協同旅館組合（以下、組合と略す）を組織した。やまなみハイウェイも開通し、徐々に観光客が増えはじめ、昭和 61 年の入湯手形導入を境に、観光客数は右肩上がりとなり、2002（平成 14）年には年間約 120 万人、入湯手形の売上は 213,612 枚とピークに達した。入湯手形は、敷地が狭く露天風呂を作ることができない旅館を救うために、組合として利益が分配されるよう作ったシステムである。黒川温泉には、このように諸課題を協働により解決してきた事例が見られる。

表-1 黒川温泉の歴史（各種資料を基に筆者作成）

西暦	元号	出来事
1961年	昭36年	黒川温泉観光旅館協同組合発足
1964年	39年	やまなみハイウェイ開通
1973年	48年	第一次オイルショック
1979年	54年	第二次オイルショック
1985年	60年	くまもと緑の三倍増計画より、補助金が支給される。
1986年	61年	入湯手形の導入
1990年	平2年	大分自動車道、鳥栖-日田間開通
1993年	5年	風の舎落成
1994年	6年	「黒川温泉一旅館」キャッチフレーズが生まれた
2002年	14年	街なみ環境整備事業開始。べっちゃん館落成。観光客数ピーク120万人突破。
2008年	20年	リーマンショック
2012年	24年	九州北部豪雨災害
2014年	26年	消費税の増税。5%→8%へ。
2016年	28年	熊本地震

3. 課題解決プロセスに関する調査

ここでは、(1)インタビュー調査の概要、(2)調査結果の概要を記した。

(1) インタビュー調査の概要

インタビュー調査対象者は、これまで黒川温泉の観光地形成に携わってきた方々の中から、役職、立場、世代などを勘案し、表-2 の 6 名を抽出した。今後、行政関係、学識者やデザイナーにも調査を行う予定である。

インタビューの手順は、①表-1 に示した黒川温泉の歴史（年表）と、表-3 に示した質問項目を渡し、調査の目的を説明し、②「人生の振り返り曲線」と名付けた、横軸に年齢を、縦軸に人生の浮き沈みを＋／－で書き記してもらった時間を 10 分程度取り、③筆者らが会

話を誘導しないように配慮し、12/19 は 4 人一緒に、12/20 は一人ずつ、インタビューが自由に、「協働」について話す形式をとった。

表-2 インタビュー対象者

日付	対象者	役職
12/19	M氏	現自治会長/元旅館組合長
	G氏	元旅館組合長
	A氏	元旅館組合長
	S氏	元旅館組合長
12/20	I氏	組合事務局長/元南小国町役場職員
12/20	K氏	現旅館組合長

表-3 質問項目

1	あなたの人生を振り返って、一本の曲線を書いてください。
2	3つ以上変化点を書き、何があったのかを書いてください。
2	上で書いていただいた、それぞれの変化点について、次の8つの質問をします。
①	その課題は、何をしようと（目的）していた時に生じましたか。
②	その課題を解決するために、何を行いましたか。
③	どのようなきっかけで行いましたか。
④	誰と行いましたか。
⑤	その時、どのようなビジョン（目標）を持って行いましたか。
⑥	その時（課題解決時）どのようなことを大切にしていきましたか。
⑦	課題解決を行う上で、苦労したことはありますか。
⑧	課題解決にあたって、キーパーソンとなった人物を教えてください。
3	これからの黒川温泉について
①	現在、黒川温泉にとっての課題や困っていることはありますか。
②	黒川温泉にとって、これからも受け継いでいきたいことを教えてください。
③	黒川温泉にとって、変えた方がいい、変えていきたいことを教えてください。
4	あなたの考える、「黒川温泉らしさ」とはなんですか。



写真-1 インタビューの様子



写真-2 黒川温泉の共同看板

(2) 調査結果

写真-1 に 12/19 のインタビュー調査時の写真を示した。図-2 に、M氏の「人生の振り返り曲線」を示した。この図を作成することにより、対象者自身が、黒川温泉に関わってから、現在に至るまでの振り返りができ、その後のインタビューをスムーズに行うことができた。

「人生の振り返り曲線」には、各人が印象に残っている出来事を 3 つ程挙げてもらっており、会話のみならずこれらの調査シートも分析対象とした。

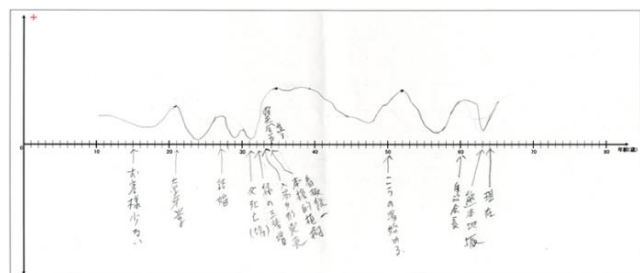


図-2 M氏の「人生の振り返り曲線」

4. 協働プロセスに関する考察

今後行うインタビューも踏まえて、調査によって得られた、黒川温泉における観光地形成における協働プロセスを、今後以下の 3 項目に整理して分析を行う予定である。

(1) 観光地形成までの課題抽出

主な課題として、以下の 3 つが指摘された。①昭和 50 年代頃までの集客、②2003（平成 15）年に発生したハンセン病元患者の宿泊拒否事件、③2016（平成 28）年に発生した熊本地震である。

(2) 観光地形成における課題解決手法

12/19 に行ったインタビューの中で、課題①に対する解決手法の一つとして、資金不足だった旅館同士が客の送迎用のマイクロバスをシェアしていたという話があり、旅館同士が協力してきたことが感じられた。

(3) 課題解決における協働プロセス

(3) に関する考察の一部を以下に示した。

M氏の曲線は、1986（昭和 61）年頃がピークとなっており、その背景には、入湯手形の導入や温泉街内部の植樹活動、看板統一活動等があったことが分かった。M氏は「こんときに、だんだん黒川一旅館っていうような、まとまってやってやらないかんっていう気持ちがみんなに芽生えてきたですね」と述べていた。

この「黒川温泉一旅館」は、現在は黒川温泉の取り組みを端的に表すキーワードとなっているが、本調査により、上記のM氏らが活動を行っていた頃に、熊本大学名誉教授の内山督先生が名付け、当時の組合員たちが、好んで用いるようになったことが分かった。

5. おわりに

さらに考察を深め、発表会時に本研究の結論と今後の課題を示す予定である。

【参考文献】

- 1) 浦達雄：黒川温泉における小規模旅館の経営動向，大阪明浄大学紀要第 4 号，2004。
- 2) 黒川温泉観光旅館協同組合：黒川温泉観光旅館協同組合設立 50 周年記念誌，2012。
- 3) 黒川温泉観光旅館協同組合：2017 年度視察資料，2017。
- 4) 鯨岡峻：エピソード記述入門実践と質的研究のために，一般財団法人東京大学出版会，2005。